

オータムブ エスタ

「俳句の未来のために」

応募作品集

ひとつ紅ほのかに明かし半夏生

滅びゆく記憶遙かに紅の花

山里に淡く降り積む蕎麦の花

伎楽面紅花の束傍らに

西見れば天地染まりし呉藍

もう飛べぬ羽音を残し秋の蝉

からつぽの空となりたる九月かな

わにていし子の打ち解けて芋煮ゆる

この香り振り返え見れば金木犀

ささくれの重たき小指紅の花

夕暮れの蜻蛉の魂光りをり

虫の闇呼ばれた気がして立ち止まる

千歳山巨人種蒔く紅の花

我になき雅もたらす紅の花

背に刺さる太陽うらみ草むしり

道の辺に紅花の種溢しおく

風の徑芒ヶ原を極めけり

冷やかに紫陽花の色褪めにけり

秋爽の条幅に散る墨飛沫

朝露に紅花摘みかなたに月山

大皿に不揃い餃子夏休み

彼岸花こころ吸はれて底の無き

実験のような紅花のしぼり染め

紅の花末摘む花と誰ぞ言ひし

みちのくの女性床しく紅の花

いま時は半夏百もの乱れ咲き

成人の日母下さりし紅袷紗

遠出して馬の祭りに天高し

摘みし人いかにをはすや紅の花

秋日和供花溢るる祖母の墓

季語辞典禁帯出ぞ流れ星

水に映る紅葉散らして鯉のゆく

天高く音楽はみんなを包む

満地朱と言われし昔最上紅

古の栄華伝える紅の花

紅の花ルーツは遠しナイル川

書を愛す父に逢いたし紅の花

武士の末裔清風焼きし紅の花